アズれ！艦船少女たち！【アズールレーン】【二次創作】

琥珀ナオ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アズレン一周年を記念して

アズールレーンを始めてから今までの活動を、ＲＰも交えて振り返ろうという二次創作企画です。

プレイヤー名【琥珀ナオ】

サーバー【マドラス】

開始時期：２０１７年１０月下旬（最初の紅染イベの終わり頃）

嫁艦：イラストリアス、Ｚ４６（，１８／９／１４現在）

基本的にはＲＰを含めたやや誇張気味の物語ですが、

メタ視点で描く物語があります。その際はタイトルに【メタ噺】と入れてありますのでご確認ください。

目次

序章～着任～ ―――― 1
本作における世界観設定 ―――― 18
高名なる白き輝き～ＨＭＳ　Ｉｌｌｕｓｔｒｉｏｕｓ～ ―――― 21
ユニコーンの憂鬱～ＨＭＳ　Ｕｎｉｃｏｒｎ～ ―――― 50

序章～着任～

別に何がしたいわけでもなかった。

ただちょっとだけ他人より人という「群れ」を動かす才能があっただけに過ぎない。

そんな自分に届いた異動通知。

それは、地球外海洋生命体セイレーンに対抗するため、人類を守る旗印となる海洋防衛連合「アズールレーン」の統括指揮官への任命であった。

いくら人類存亡の危機でも、その前線基地となる場所はアズールレーン主要４国のどこから行こうにもやや遠い（とはいえ元々はユニオン領であった場所）島に作られているため、好きこのんで行きたがるものはいない。

しかし、先のセイレーン襲撃により制海権の９割を損失しながらもなんとか撃退することが出来たのはメンタルキューブという超技術、及びそれによって生み出された「艦船少女」達の力あってこそだ。

誰かがやらねばならぬ。

そんな中、若くして少佐という地位に就いたばかりで、碌な人脈も築いてなかった自分に白羽の矢が立ったのだろう。

だから、これは避けられぬ運命として受け入れるほかなく。
また、ここから始まる人生はきっと、誰にも真似のできないものとなる。
そんな確信めいた予感があった。
…
異動通知を受け取り各種手続きを終えた後、自分はほぼ全ての財産を持って異動先の「アズールレーン対外敵生命体対策本部」となる島へと向かっている。
移動手段は当然ながら船だ。
そして、この船はただの船ではない。
「指揮官！ここにいたんですね！」
デッキで何気なく遠くを眺めていると、後ろから声をかけられた。
振り向くと、そこには小柄な体躯、白く輝くノースリーブトップレス、そして、その身長と同じぐらいの長槍（ジャベリン）を抱えた少女がいた。
「どうしました？もしかして酔っちゃいました？」
「いや、そんなことはない。さすがロイヤルだ。操船も優雅で乗り心地がいい。」
「えへへ～」
外見通りの年頃の少女のように照れる彼女であるが、当然ながら普通の少女ではない。

彼女は現在自分達が乗っているロイヤル製駆逐艦『ジャベリン』の艦船少女だ。
『艦船少女』。メンタルキューブというアイテムを用いて生み出される『船の化身』。
元来多くの水兵達によって運用される船を、彼女達はその身一つで全て掌握し、操作することができる。
また、彼女たちの中核をなす『リュウコツ』が壊れない限りは、例え大破していたとしても適切な資材投入と精神的な休息によって通常の船ではありえない速度で回復する。
そんな彼女達は嘗ての『大戦』によって製造され、投入された『軍艦の記録』をベースに『その船に対する人類の記憶』が結晶化した存在である。
そのため彼女達の真価はまさに、『海戦』において発揮されるものであった。
《…こちら艦隊左翼・綾波、１０時の方向より国籍不明の小型船団が接近中。》
《こちら艦隊尾翼・Ｚ２３、こちらからも確認できます！》
艦内に通信が響きわたり、進行方向左側からサイレンが鳴り響く。
「敵襲!?」
「待て、まだそうと決まったわけじゃない。迂闊に攻撃して同盟国だった場合が問題だ。綾波、旗艦は確認できるか？」
《……旗艦らしきものはない…です。》

「このままで進めば該当船団に接触はどれ程になる?」
この場合の接触とは、射程範囲に相手が入ってくるまでの時間である。
《10分程になるかと。》
「それなら先ずは汽笛・探照灯・電信で対話を試せ。全艦、1時の方向へ舵を取れ。ジャベリンは2速落とし、ラフィーは1速上昇し綾波の2時前方へ、輪形陣でジャベリンを右翼に回せ。」
《了解です。》
《了解!》
《ラジャー…》
「はい!」
ジャベリン船体の速度が落ち、右に動いていく。その艦首の先をふんわりとしたツインテールの少女、ユニオン製駆逐艦『ラフィー』がまるで海上を滑るように横切っていった。
そう、これが艦船少女達の本来の姿。
今回ジャベリンには自分を乗せる必要があったためフネ型になってもらっているが、本来彼女達はあのようにヒト型で運用するものであった。
数分以内に、彼女達は自分の指示したように陣形を組み直した。人間の操作する艦隊

では、余程の練度の乗組員を乗せないとありえない速度だ。
そして、陣形を組み直した頃に、最初に船団を発見した艦隊左翼、重桜製駆逐艦『綾波』より連絡が入る。
《指揮官、指示された汽笛・探照灯・電信、どれも反応なしです。》
「そうか、それなら最後通牒だ。それ以上接近してくるようなら発砲すると電信を入れて赤の発煙筒を炊け。
各艦、射程圏内に船団が入り次第発砲を許可する。」
綾波が通信をしながら発煙筒を炊くのが見えた。緊張が走る。
数分が経過する。
《敵船団、接近…綾波、発砲します。》
その通信とほぼ同時に、綾波の主砲、１２７ｍｍ連装砲の発射された爆音が鳴り響く。
弾は命中。先頭を走っていた船の左舷前方を砕いた。
望遠鏡で見てみれば船員達もかなり慌てている。そうならないように再三勧告したはずなのだが…。
「まぁいい。ラフィーと綾波は１速上げて敵船団の左翼を牽制しろ。沈めるつもりで撃って構わん。Ｚ２３は先頭の船に照準を。おそらく９時方向へ旋回するだろうが、追撃はいらない。とにかく目の前に来た船に攻撃をし続けるんだ。」

短く「了解(Sir)!」という返事を返し、彼女達は迅速に指示に対応する。
「鬼神の力…味わうがいい。」
綾波の放った533mm四連装魚雷のうち一本が敵船団の左翼側の一隻の横腹に当たり、一発の魚雷にしては大袈裟すぎるほどの轟音を立てて爆発、撃沈させた。
「凄い威力だな…。」
「綾波ちゃんは雷撃が得意ですからね。特に『鬼神』が発動すれば尚更ですよ。」
スキル。艦船少女達の持つ異能であり、彼女達が対セイレーンの切り札たる所以。
彼女達は『船の記録』と『人の記憶』で出来ている。そして、それらは「かの大戦の如き戦果をあげてほしい」という『願い』となり、彼女達の力(スキル)となった。
綾波のスキル『鬼神』は、ソロモン海の海戦において雷撃を中心に数多くの船を沈めた戦果を具現化したもの。
不定期ではあるが、一時的に雷撃による攻撃の威力を何倍にも膨れ上がらせ、並大抵の船であれば一撃で沈めるほどの威力を発揮する。
勿論、綾波だけではない。この場にいるジャベリン、ラフィー、Z23にも、それぞれに固有のスキルを持っている。
艦船少女の運用において、このスキルを正しく把握し、どの戦局においてどの艦を投入するかの判断こそが、指揮官に求められる最大の能力なのだろう。

…

開戦から３０分足らずで戦線は解除された。

綾波に続きラフィーも一隻を撃沈し、追撃担当の鉄血製駆逐艦『Ｚ２３』の射撃による誘導によって敵船団は撤退。

この海戦によるこちらの損害はなし、綾波、ラフィーの受けた損傷も問題にならない程度のものであった。

「綾波ちゃん、ラフィーちゃん、Ｚ２３（ニーミ）ちゃん、お疲れ様！怪我は大丈夫？」

《問題ない…指揮官は無事？》

「あぁ、仔細はない。各艦、初期配置に着いて母港へ向かうぞ。」

…

アズールレーン対外敵生命体対策本部、ここの常駐員が『母港』と呼んでいる基地は、最新鋭の技術で整備がされた、まさに『人類の叡智の結晶』といえる場所であった。

到着して早々にジャベリンと、ユニオン製駆逐艦アマゾンに案内され指揮官用の執務室に行く道すがら、この基地の施設について説明を受ける。

見ると、この基地の大半を占める敷地は、まるで学校のような施設が立ち並んでいた。

「あのいかにもなビルがユニオン寮、その隣の煉瓦造りがロイヤル寮、木製平屋建ての建物が重桜寮で、あの無骨なコンクリート製のやつが鉄血寮ね。」

「ロイヤル寮は紅茶がいっぱい置いてありますからね！指揮官も飲みたくなったら是非来てください！」

「そしてこれが指揮官の執務室・私室のある総合寮舎だ。」

それは四つの寮の全てから等距離の位置に立っていた。

中に入るとまさに学校という雰囲気である。

そして、最上階は他の階層よりも廊下が短く、突き当たりに校長室よろしく立派な扉と『指揮官室』の看板が掛かっていた。

指揮官室に入ると広々とした執務室となっている。応接テーブルやワークデスク、本棚など、必要最低限のものが揃っている。

何より、ワークデスクの向こう側の大きな窓の外には、この母港の顔ともいえるドックが一望できた。

「ほぉ…これは、なかなかどうして…」

感嘆の息を漏らす。振り返るとアマゾンとジャベリンが妙な笑顔でこちらを見ていてつい恥ずかしくなった。

「気に入ったか？そっちの扉の向こうは指揮官の私室になるが、申し訳ないが後でゆっくり見てくれ。

それよりも、だ。」

アマゾンが手元に持っていたファイルブックを広げてワークデスクに置く。
「この母港はつい最近開設したばかりだ。さらに言うと、私も含めて殆どの艦は所有権が主要４国の下にある。だから、指揮官が直接管理・運用できる艦は現状においてこの５隻のみだ。」
渡されたファイルブックの内容はこの母港に帰属する艦の一覧。
その内容は現在『ジャベリン』『綾波』『ラフィー』『Ｚ２３』『ロング・アイランド』のみ。
これらは主要４国が協力し合うと言う証明のために寄贈された艦だ。
各国から駆逐艦が１隻ずつ。
そして、艦隊編成上旗艦となる主力艦（戦艦及び空母）が最低一隻必要であると言うことから、ユニオン製軽空母『ロング・アイランド』が寄贈された。
「しかし、これだけではなぁ…」
「その通り。現在、この母港はとにかく戦力不足だ。セイレーンの襲撃はいつ来るかわからない。その時に備えて、まずは新規に艦を建造する必要があることを覚えておいてほしい。」
「そうだな。国連からの情報によれば現在人類制海権におけるセイレーンの発見は見受けられないとある。今のうちに戦力を補充しておかなければな。」

この母港での最初の仕事は決まったようだ。

…

造船所1番ドックにて。

「これがメンタルキューブニャ。」

母港の技術・流通部門を担当しているらしい重桜製工作艦『明石』が拳大程度のサイズの青白く発光する金属のような、石英のような物体をくれた。

「本当は貴重なものだからホイホイと渡しちゃいけないんだけど、まぁチュートリアルみたいなものだと思ってほしいニャ。」

「あぁ、感謝する。」

「早速だけどそれで一隻建造してみるニャ。」

「これ、作れるものを指定はできないのか？」

「残念だけど無理だニャ。

メンタルキューブが艦船少女を生み出す理屈はイマイチわかってないニャ。人類の記録と記憶に残っている艦を作ることができる。それだけニャ。

それでも研究の成果である程度の傾向の設定はできるようになったニャ。

駆逐艦や軽巡洋艦みたいな小さな船なら必要なメンタルキューブは一個で建造できるようになったニャ。あと、戦艦と空母くらいなら分けて建造できるみたいニャ。」

そこまでの説明を受け、「まぁ仕方ないか」と自分を納得させる。
メンタルキューブは艦船少女を建造するために必要なアイテムであるが、どのような構造なのか、どんな機構で艦船少女を生み出しているのかなどは全くのブラックボックスと言われている。
この資源の入手元も、セイレーンのヒト型艦を撃沈した跡に残っていたり、何処からともなく海から流れてきたり、流れ星として降ってきたりと様々である。
さて、それはそうと、メンタルキューブをドックのプールの真ん中に浮いている台に載せる。
「指揮官、ここからは近くで見るのは危険だから高みの見物をするニャ。」
明石に連れられドックの上の監視室から見下ろす。
「それじゃあ皆んな、お願いしますニャー。」
明石の号令に、ドックの建造担当の技術員達が従い建造シーケンスが開始される。
メンタルキューブに向かって、四方からレーザーが照射される。
するとメンタルキューブが発光を開始、不可思議な力場を発生させて浮き上がった。
「この状態で数時間レーザーでエネルギーを供給し続けるニャ。そうするとある時点で反応が変わって船になるニャ。」
「どれぐらい時間がかかるかとかはわかるのか?」

「一応キューブから出る光の強さであとどれぐらいで臨界点に達するかは分かるニャ。統計を取れば建造時間でどの艦が作成されるかの予測ができると思うニャ。」

説明を聞きながら、少し安心していた。

未知の物質で船を作るなどと言うのだ。作った船が本当に味方となるものなのかと不安に思っていたが、ここで働いている彼らは、それをキチンと理解して、少しでもこの未知の技術の解明に向けて努力しているのだと言うことがわかったからだ。

それから明石に指定された時間になるまでジャベリンと執務室でいくらかの事務作業をこなしていた。どうも、彼女は『秘書』のつもりらしい。

さて、所定の時間が経過した。

建造ドックに戻ると、明石がホクホクした笑顔で迎えてきた。

「指揮官。建造は問題なく終わったニャ。早速進水式ニャ！」

そう言って明石が合図を送ると、ドックの水門が開く。

そして、中から人影が現れたと思った瞬間、目を覆うような光が襲った。

「何だ?!」

「えへへ、どう?ビックリした?初めまして指揮官、グリッドレイだよ！サラトガちゃんの護衛を勤めてたんだ～。」

目を開くと、セーラー服を着て、カメラを構えた小柄な少女がいた。

「グリッドレイは資料によるとユニオン製駆逐艦だニャ。建造した艦についての資料は、後で指揮官の部屋に持って行くニャ。」

明石はそう告げると先に帰って行く。どうやら、生まれたばかりの彼女を案内する役目は自分にあるらしい。

「それじゃあ、まずは寮舎へ行こう。」

…

寮舎へと向かう間にグリッドレイと話をしていてわかったことがある。

彼女達は誕生こそ建造ドックの中での存在だが、その記憶と呼べるデータがすでに存在する。

その内容は基本的にかの大戦期における艦歴に準拠しており、まさに『擬人化』された記憶として保有しているようだ。

例えば自身のオリジナルと言える艦がいつ何処で作られたか。これまでにどれほどの勲章（バトルスター）を貰ったか。誰と共に戦い、誰と戦ったか。そして、オリジナルの艦はいつ何処でどのように最期を迎えたか。

そして、その記憶に基づいて、彼女らの性格も形作られているのだろう。

なので、軽空母サラトガの護衛艦としての役目を誇りに思っているであろうグリッドレイは、

「でねでね！サラトガちゃんのこの一瞬！このキュートな顔がキリッと引き締まった瞬間が最高で～！」

と、このようにサラトガの話題ばかり話している。

ともあれ、彼女をユニオン寮に案内すると、そこにいたラフィーから連絡を受けた。

「指揮官、ジャベリンから伝言。ユニオン軍部の人が来てるって。あとロング・アイランドが指揮官室に向かったよ。」

そうだった。今日はユニオンの軍部の人間が視察にくる日だった。

慌てて身なりをチェックしながら指揮官室に戻る。

「失礼します！先程まで新規建造艦の進水式査察を行なっており、お待たせしました！」

指揮官室に入り、すぐさま足を揃えて右手を頭の横へと挙げるユニオン式敬礼を行う。

「うむ、御苦労。だが腕を下げたまえ。ここはユニオン基地ではない。ここはアズールレーン基地。この場においては、君こそが最高権限を持つものだ。

違和感はあろうが、君がどの国の人間とも公平に接する事こそが、この同盟が人類全体のためであると言うことの証明になる。」

「…了解しました。それでは失礼して。」

腕を下げ、応接テーブルの脇にジャベリンが立っている椅子に座りまっすぐ相手を見

据える。
「それでは、今回のご用件は、事前に伺っていたこの基地の視察という事でよろしいでしょうか？」
「うむ。だが、今回見せて欲しいものは基地そのものではなくてな。いわゆる、この基地の戦力の評価だよ。」
「と、言いますと？」
　視察員は言いにくそうな表情を見せた後、重々しく口を開いた。
「…ロイヤルの偵察艦隊が襲われた。相手は鉄血艦隊だ。」
「…まさか。鉄血はアズールレーンの主要４国ですよ!?」
「そのまさかだ。報告によれば、鉄血艦隊の艤装は我々の技術とは一線を画す挙動を示した。」
「…よもや、セイレーンの技術をものにしたと？」
　近年、アズールレーン主要４国の間である議論が行われていた。
　セイレーン撃退戦の際に、何隻かのセイレーン艦船を鹵獲することに成功した。
　その扱いに関し、ユニオンは
「解体、分析を行い、対抗戦力となる技術を開発すべきだ。」
　と提案した。

しかし、ここで鉄血から別の意見が提示される。
「セイレーンの技術を、我らの技術と融合させ、その力でもってセイレーンに対抗すべきだ。」
この意見に、ユニオン及びロイヤルの首相は猛反発、一方で重桜はこれに賛同した。
この議論はいまだに平行線のまま、結論が先延ばしにされていた。
だが、この報告が確かならば、鉄血は既にセイレーンの技術を組み込んだ新たな艤装を開発していることになる。
「それと、最近重桜の動きが妙だ。」
「鉄血…重桜…まるで嘗ての大戦と似ていますね。」
嘗ての大戦も、鉄血・重桜が手を組み、それに対抗する形でユニオンとロイヤルが手を結んで世界中で海戦が行われた。
「あのような大戦を繰り返している余裕はない…そのはずだが、もしも何かあった時、我々はそれに対処せねばならん。時には貴官の助力を乞う場面もある。
そこで、だ。現在、我が国からヨークタウン級空母『ホーネット』を連れて来ている。
彼女と君達の艦隊で模擬戦をしてもらいたい。」
「なるほど、我々の戦力が対セイレーンに充足しているかを測るわけですか。」
「その通り。」

もし懸念が的中し、鉄血、重桜がアズールレーンより離反した場合、ユニオン、ロイヤルはその対応に追われる。
その間にセイレーンによる襲撃があれば、対処しきれないだろう。
そこで、このアズールレーン対外敵生命体対策本部は積極的にセイレーンに対処してもらわなければ困るという事だ。
「わかりました。演習海域を手配します。」
演習申請書を書き、印を押して受理。
おそらく事情を事前に知っていたのであろうロング・アイランドを旗艦に起き、即興で艦隊を組んで演習場へと向かうのであった。
…

本作における世界観設定

基本的にはアズールレーンのゲーム上の公式設定に準拠。
一方で一部設定に改変を加えています。

【勢力図】

まず、ゲーム内メインストーリーで説明される戦局は、本二次創作においては、
「対セイレーン同盟アズールレーンに加盟していた主要４国が真っ二つに分かれてかつての『大戦』を再現するように戦争をしている状態」
となります。

主人公である指揮官、および彼の下で戦う艦船少女たちの役割は、
「かつての『大戦』を繰り返そうとしている鉄血・重桜の『レッドアクシズ』を、ユニオン・ロイヤルが残った『アズールレーン』による撃破を目的として加勢すること」
つまり第三勢力として参戦していると言う体です。

それと同時に
「不定期で各地で勃発する海戦の鎮圧、鏡面海域の捜査・探索、セイレーンの捜索・撃破」
本来の役割である対セイレーンのお仕事もしていると言うわけです。多忙ですね。

【艦船少女のアレコレ】

ゲーム中に登場する多くのキャラクターを本作では『艦船少女』と総称しています。

彼女達はメンタルキューブにエネルギーを与えることでランダムに一隻建造されます。

高速建造材はメタ噺では出て来ますが、ＲＰストーリーではリアリティ優先のため使っていない体です。

その設定、記憶などはゲーム準拠と思ってください。

なので、私がゲーム中で入手出来ていない艦については本作中でも触れられないのでご了承のほどを。

普段海域で戦っているときは『ヒト型』で活動していますが、物資の運搬や人間を乗せる必要がある場合、『フネ型』という、所謂軍艦の姿になります。

この時に戦おうとした場合は、艤装は軍艦の方にあるので、そっちから打つ必要があります。また、その性能もなぜかヒト型に劣ります。

【ケッコン】

本作においてケッコンとは、

「指揮官と艦船少女との間の思いがある一線を超えた時に、艦船少女の性能の限界を突破する儀式」

としています。

ケッコンの為に必要なものは、

・誓いの指輪を送ること→正確には指揮官の手で艦船少女の左の薬指にはめてあげること。

・互いの親密度を一定を超えること→本作中ではちょっぴり大人な設定なので、所謂「和姦成立」するほどの関係が目安となります。

必ずやらなければいけないわけではないですが、艦船少女達にとってみても、自分はいいのに相手がしてくれないと不安になるでしょうから、大抵は実行すると思います。

が、本作中においては描写はしません。できる限りぼかします。これ、全年齢対象なので。

高名なる白き輝き～HMS　Illustrious～

レッドアクシズによる宣戦布告から数日。
手探りながらこの母港の運営に関わる仕事は順調に進んでいる。
最近は主力艦の不足を補うために特型と呼ばれる空母を中心とした建造というものに着手した。
どうやら今回の建造は思ったよりも時間がかかると明石は言っていた。それだけ強力な艦が出来るだろうとも。
そして、ついに完成した。
明石に呼ばれ、その艦の進水式に立ち会っている。
「それじゃあ、お披露目ニャアー」
建造ドックの扉が開いた。中から静かな足音が聞こえてくる。
「指揮官様、御機嫌よう。イラストリアスが着任しましたわ。」
そこに現れたのは、陽光にきらめく白き聖女だった。
彼女の優しげな笑顔、長い手足に豊満な肉付き、透き通るような声、その身に纏った純白のワンピース。

その全てに息を呑んだ。

「指揮官、どうしたニャ？なにかあの子におかしいところでもあったかニャ？」

背中を明石に叩かれてハッと我に帰る。

「あぁいや。なんでもない。えっと…ロイヤル製正規空母『イラストリアス』、だね。これからよろしく頼む。」

取り敢えず他の艦と同じように挨拶と握手を求めた。

が、イラストリアスにその手を握り返された瞬間、指先の感覚まで鋭敏になるのがわかった。

艦船少女達は皆少女だ。その身体構造もまた少女のものであり、触れれば人間とそう変わらないことも分かる。

これまでも彼女達と初対面の時は握手をしてきたが、それぞれ個性的ではあるものの、皆少女らしい柔らかな感触であったのは覚えている。

しかし今回のそれは何かが決定的に違った。シルクの手袋越しに触れたからだろうか？

イラストリアスの握手が非常に静かで優しく、包み込むような握り方だったからだろうか？

両手で右手を包み込まれ、僅かながら低い目線をあげて笑顔を向けてくれた彼女を見

て、背筋から脳天まで電撃が駆け上がっていったのがわかった。
「…っ！よ、よし。それじゃあ、この母港の案内をしよう。…ついてきてくれ。」
「はい。」
明石がデータベースから引っ張ってきた資料によれば、
イラストリアス。ロイヤルの正規空母で、世界で最初に構想され、作製された『装甲空母』。イラストリアス級ネームシップ。
かの大戦においては、幾度となく空襲に見舞われながらも、ついに終戦まで生き延びた耐久性を誇る。
彼女のスキル名にもなっている『装甲空母』とは、空母に乗せる艦載機のドックを守るために、飛行甲板そのものを装甲にしようという着想から生まれた空母である。
その最初のデザインのイラストリアスの場合、甲板ではなく艦載機ドックの天蓋を装甲化している。この装甲の硬さによって、幾度となく受けた空襲で飛行甲板が傷つこうとも空母、軍艦としての最低限の機能は残り続け、幾たびもの補修を繰り返して最後まで生き残った。
彼女を見て最初に目を惹くのはやはりその胸囲だろう。
基本的に、生み出される艦船少女の外見年齢は、元となった艦船のサイズに影響されると言われている。

つまり艦体の大きい戦艦や空母は駆逐艦や巡洋艦に比べて成熟した女性の姿に近くなる傾向にあるということだ。

その中でもイラストリアスは特に胸が大きい。これはいかなる理由なのか。

「…きゃっ」

小さな悲鳴、背中にのしかかる重みと、押し付けられる柔らかな感触。

後ろを歩いていたイラストリアスが躓いてしまったらしい。

「大丈夫か？」

「ご、ごめんなさい指揮官様。あの…恥ずかしながら私、こんな身体なので、うまくバランスが取れなくて。ちょっとしたことで大きく揺れてしまうのです。」

イラストリアスの肩を支えながら後ろを振り向くと、恥ずかしいのか少しだけ頬を赤らめて俯き気味に目をそらす彼女の表情をみて、頬をピリピリとした感覚が走った。

後日に資料を調べてみると、イラストリアスは艦体上部を装甲化したせいで重心が上に寄っており、ゆっくりでないと旋回もままならないほどにバランスの悪い艦船であったらしい。

おそらく彼女のアンバランスと言われるほどの体型はそこからきているのだろう。

「い、いや。問題ない。歩くのが大変なら、俺に掴まってもいいからな。」

つい、そんな言葉が出てきてしまった。

イラストリアスも少しばかり驚いたような表情のあと、嬉しそうに、
「では、お言葉に甘えて、失礼しますね。」
左腕を抱え込むように掴まえてきた。
「っ!?…あ、あぁ、じゃあ行こう…。」
思いもよらぬほどに密着してきた彼女に狼狽えながらも、ロイヤル寮へと向かうのであった。
…
「指揮官、なんだか楽しそうですね?」
秘書艦として仕事をしていたジャベリンが、唐突にそんなことを言い出した。
「え?いや、この状況を見てそれを言えるか?」
デスクの上には書類が山積みとなり、執務室は修羅場と化している。
重桜の一航戦、二航戦による奇襲、およびその撃破の過程におけるユニオンの空母1隻、戦艦2隻の損失。
その穴埋めのために母港では積極的な制海権の獲得のために動き出さねばならなくなった。
まずは兎にも角にもと戦力補充のために新規艦の建造を急ピッチで進めている。航空戦力の重要性は先の戦闘でも明らかだ。

しばらくの間は特型建造を優先的に進める予定でいた。
幸いにも幾らかの艦がこれまでの戦闘の中で入手できた。
どうやら、艦船少女同士の戦闘で撃破された艦のリュウコツは、稀にその場で新たな艦船少女を生み出す可能性があることがわかった。
それによってロイヤル製巡洋戦艦『レパルス』や重桜製正規空母『飛龍』、他にもロイヤル製駆逐艦『コメット』『クレセント』などが着任している。
しかし、これにより比較的高効率で艦隊を編成するための戦力が補充できたのはいいが、
彼女達の力をさらに引き出すための訓練施設の拡充や、鹵獲（ということになっている）船の正式な登録手続き、なにより先の戦闘でのこちらの受けた損害を補填するための各種作戦など、着手すべき事柄が多すぎて目が回っているのが現状だ。
あまりにもするべきことが多いので、秘書艦だけでなく、各自手の空いてる艦船少女達には任意で書類の仕分けなどを手伝って欲しいと通知している。
「こんなに仕事が山積みで、尚且つ彼方此方でセイレーンの影がちらついてる中で楽しいなんて思ってる余裕はないだろう。」
「そうなんですけど…。言い方が間違ってましたかね？少し、明るくなった気がします。」

「…？」
　ジャベリンの言わんとしてることがイマイチ理解しきれず首を捻ってると、指揮官室の扉をノックする音が聞こえた。
「ジャベリン、頼む。」
「はーい！どうぞー。」
　扉を開けると、そこにはイラストリアスが立っていた。
「イラストリアス、どうしたんだ？」
「最近みなさん忙しそうにしていらっしゃるようですから。私も微力ながらお手伝いをと思いまして。
　それと、指揮官様に差し入れを持ってきましたわ。」
　イラストリアスの手元には、お盆と、それに乗ったティーセットとクッキーがあった。
「っ!!ジャベリン、受け取ってあげてくれ。」
「あ、はい。イラストリアスさん、ここまでよく運べましたね？大変だったでしょ？…って、えぇ!?」
　お盆を受け取ろうとしたジャベリンだったが、手の上に乗せたはずのお盆がひとりでに浮き上がった。
「フフフ、少し、ズルをしちゃいました。」

イタズラ成功と言わんばかりにクスクスと笑みを浮かべるイラストリアス。
彼女の周りをよく見ると、お盆の持ち手には何やら紐のようなものがくくりつけられており、その紐の先を辿ると、プラモデルのような小型の艦載機がそれを引っ張り上げていた。
「ほぉ、そんな使い方もできるんだな。」
「一人で歩くときは、こうやって艦載機にバランスを取るために手伝ってもらっているんですよ。」
お盆が宙に浮いているので、両手が空いたイラストリアスは、「少し、こちらのテーブルの上を片付けさせてください。」と、応接テーブルの上の書類を動かそうと屈んだ。
「あっ…」
「おっと、無理はしなくていい。俺がやろう。」
体勢が崩れかけたイラストリアスの肩を支えて、ソファに座らせる。
「申し訳ありません指揮官様。」
「や、気にする必要はない。」
そうしてテーブルの上を片付け始める。
しかし、それを見ていたジャベリンは、疑問を抱えていた。
（いつの間に指揮官はあそこにいたんだろう？）

さっきジャベリンに指示を出したときはワークデスクの前に座っていたはずだったのだが…。

…

そんなこんなで休憩がてらのティータイムを過ごした後、イラストリアスも加わっての作業が再開した。

イラストリアスは資料の分類に専念してもらって、自分は資料の確認、署名等を、ジャベリンには各部署への連絡を任せることにした。

整備ドックへと送る書類がまとまったのでジャベリンに持って行ってもらった。

部屋にはイラストリアスと二人。特別に話す事も思いつかなかったので黙々と作業をしていた時のこと。

「指揮官様は…女の子のどこに魅力を感じますか？」

唐突にそんなことがイラストリアスの口から飛び出した。

「…うん？どういう事だ？」

「そのまんまですわ。指揮官様はどんな女の子が好みなのかな～って。」

「う…む…。あまり、考えたことがないな。」

学生時代は勉学に励み、時には友人と阿呆な遊びで盛り上がったりもしたが、特別女性との関わりは無かった。

軍属になってからは目の前の戦いや仕事に掛り切りであり、周りの人間と親交を深めるよりも、早く出世したいという気持ちだけで突っ走ってきた自覚がある。
「指揮官様。私達艦船少女は、人の思いや願いから生み出され、そしてその思いを守り、人類の平和を願う心を力に変えます。」
「なるほど…だが、それと俺の好みがどう繋がるんだ？」
イラストリアスは少し考えるように顎に手を当てて、それからこちらに向き直った。
「人々の思い、願いは重要なファクターです。しかし、それ以上に大事なのは、私達自身の心、そして、私達の身近にいる人たちの心なのです。
そして私達にとって一番身近にいるのは指揮官様ですわ。指揮官様が私達に向けてくれる思いの強さ。私達が指揮官様に向ける思いの強さ。それを高めることが私達の力を引き出す要となります。」
なるほど、と合点がいった。
彼女達のメンタリティを強くすること。それが彼女達の強さにつながる。
ならば自分がすべき事は、母港の運営、艦隊の指揮は勿論だが、前線で戦う彼女達の、特にメンタル面でのサポートが最重要なポイントなのかも知れない。
「忠告ありがとうイラストリアス。少し、君達との接し方をもう一度考えて見るよ。」
「お役に立てたのなら幸いです。」

（私が本当に指揮官様に聞きたかったのは、そうじゃないんだけどなぁ…）

イラストリアスの心の声が、指揮官に聞こえるはずもなく、再び黙々とした作業に戻ったのであった。

…

ソロモン海戦が始まった。

重桜とユニオンの艦隊が入り乱れている。

ユニオン側からの報告によれば、お互いに指揮系統が混乱しており、戦局は混迷を極めているという。

互いにピンチではあるが、逆に言えばここで自分達が介入する事で流れを一気に掴むことができるとも言えるだろう。

あらゆる危険が想定されるこの任務。母校における最高戦力を投入すべきと判断した。

「というわけだ。以下１２隻によるソロモン海戦攻略作戦・序を開始する。

第一艦隊、『イラストリアス』『ウォースパイト』『ユニコーン』『ジャベリン』『エクセター』『高雄』

第二艦隊、『レパルス』『祥鳳』『エンタープライズ』『プリンツ・オイゲン』『綾波』『サンディエゴ』

戦況は混乱しているが、その状況だからこそ、我らに有利にことを運べる可能性が高い。

指揮権は旗艦であるイラストリアスとレパルスにある。こちらからの指示がない場合、この両名の判断に従うように。」

「はい!!」

「それでは、本日09時00分(マルキユウマルマル)より出航する。確実補給と準備を万全にしておくように。」

各自が整備ドックに向かう中、指揮官室にはイラストリアスだけが残っていた。

「イラストリアスは準備は大丈夫なのか?」

「はい、事前に聞いていましたので。昨晩のうちに整備も補給も済ませてあります。」

「そうか…それなら折角だし、紅茶を淹れてもらえるか?」

「っ…はい!」

あの日以来、イラストリアスはちょくちょく指揮官室に顔を出すようになった。

来るたびに紅茶とお菓子を囲み、仕事も手伝ってもらっていた。

それからジャベリンからの提案もあり、その頃から秘書艦をジャベリンからイラストリアスに引き継いで、今はもっぱら日中はイラストリアスと過ごす時間が増えていた。

アズールレーン母港の所属艦が増え、ロイヤル寮では特定の船達によって構成される

『ロイヤルメイド隊』なるものもいるらしく、時折彼女達が紅茶を差し入れに来ることもある。

しかし、イラストリアスが部屋にいる時は、ロイヤルメイド隊ではなく彼女自身が紅茶を淹れてくれている。

どちらかが頼んだというわけでもなく、何故かイラストリアスがいる時はロイヤルメイド隊も来ない。

「そろそろ休憩にしよう」という言葉が合図となり、彼女が自分の私室にあるキッチンでお湯を沸かして紅茶を淹れてくれるのだ。

もともとコーヒー派だった自分からしてみれば、紅茶の違いというのはよくわからなかったが、いろんな茶葉を持ってきて、それぞれの魅力について語る彼女の楽しそうな顔を見ていたら、なんとなく味の違いがわかるようになった気がする。

（…ん？そういえば、直接「紅茶を淹れてくれ」って、初めて口にした気がするな？）

振り返ってみればなんだか偉そうな態度な気がする。今後は気をつけるとしよう。

そんな風に心の中で独りごちていたら、私室の方から声が聞こえてきた。

「指揮官様、準備が出来ましたわ。今そっちに持っていきますね。」

任せきりはよくないなと、デスクから腰を上げると、視界にあるものが映る。

艦載機。戦場では本物と同じサイズのそれとなって敵を襲うが、日常においてはイラ

ストリアスの第二の手足となって彼女を補助する存在。
それは現在台拭きを取り付けられ応接用テーブルの上を滑っていた。
（器用なもんだ。）
と、感心しながら、私室へ向かおうとすると、既に私室用の丸盆に乗せたティーセットを持ってイラストリアスが出てこようとしていたところに鉢合わせてしまう。
「きゃっ!!」
「っ！危ない！」
驚きのけぞった勢いでイラストリアスはバランスを崩す。
このままでは彼女の持った丸盆に乗った沸かしたての紅茶が彼女に降り注ぐことになるだろう。
スローモーションに見えた展開。身体は思わず地面を蹴って、彼女の頭と身体に腕を回して抱きかかえるように一緒に倒れ込んだ。
「ッッッゥ!!」
「し、指揮官様?!痛っ?」
背中にガツガツと硬いものが叩きつけられ、ほぼ同時に焼かれるような痛みが襲いかかる。
あまりの痛みに腕に力が入り、イラストリアスに負荷をかけてしまったようだ。彼女

の声にハッとしてゆっくりと息を吐きながら彼女に回していた手を戻す。
　心頭滅却すれば火もまた涼し。精神統一の為に呼吸を意識しながら、すぐさま上着を脱ぎ捨てる。背中側には朱茶色いシミができていた。
「申し訳ありません！大丈夫ですか指揮官様!?」
「あぁ…大丈夫。上着越しだったから内側までは少ししか入ってない。火傷にはならないよ。
　それより、怪我はないか？つい力を込めてしまったが…。」
「いいえ！私なんかの心配は無用です！それよりも…」
「馬鹿なことを言うな！これから作戦があると言うのに前線に立つお前が怪我をしていては駄目だろう！」
「…っ！す、すみません。
　…紅茶、溢れてしまいましたね。あぁ、そろそろ時間です。私は出航の準備をしなければなりません。
　ロイヤルメイド隊の子達にカーペットのお世話はお願いしておきます。
　指揮官様は、早くお着替えになって、港で待っていてくださいね。」
　彼女はそう口早に告げて、心なしかふらつく足取りで部屋を出て行ってしまった。
　あぁ、またこれだ。

どうしてか、自分は予定が狂うような出来事があるとカッとなりやすい。
これまでは唐突に襲ってきたトラブル対応ばかりであったからそんなことを考える余裕はなかった。
しかし今回のソロモン海戦攻略作戦は、自分がここにきて初めて自らの意思で立案し、計画した作戦だったからか、どこかで神経質になっていたのだろう。
それに、イラストリアスは今回の作戦の旗艦、要に当たる。その彼女に何かあってはいけないのは当然のことだ。
しかし、そうじゃない、そんなことが言いたかった訳じゃないのに、自分の口からはそんな建前上の言葉しか出て来なかった。
見ろ。イラストリアスの表情を。自分が勝手に庇って負った怪我を自分のせいだと責任に感じてしまっているじゃないか。
それに、せっかく心配してくれた子に対して仕事の都合で叱りつけてどうする。この場合かけるべき言葉はそうじゃないだろう？
その日の作戦は順調に完遂された。
ただし、一つだけ懸念事項が残った。
イラストリアスが、中破した。
…

イラストリアスの代わりに報告に来たロイヤル製戦艦『ウォースパイト』、彼女によれば、敵艦隊の中核であった重桜製正規空母『翔鶴』を撃破し、作戦は完遂した。
しかし、翔鶴の撃破の直前にこちらに向かっていた自爆ボートに狙われたユニコーンを庇う形で、イラストリアスが前に出て正面から受けてしまい、怪我をしたのだと言う。
幸いリュウコツは無事で、翌日未明には整備ドックでの修理も終わったそうだ。あとは今日1日分も休憩していれば怪我そのものは完治するだろうとのこと。
しかし、とウォースパイトが続けた。
「彼女は正午前には目が覚めましたわ。活動においても支障はありません。しかし、とても落ち込んでいて、部屋から出てこようともしないのです。」
「そうか…ウォースパイト、報告ありがとう。」
一言で礼を言い、ウォースパイトを下がらせようとしたが、彼女の表情はまだ何かを言いたげであった。
「…どうした？まだ、何か報告することが？」
「いえ…あの、これは正式な報告ではなくて…」
どうやら、個人的に気になることがあったと言うことのようだ。
「…話してくれないか？」
「…ええ。

イラストリアス、あの子は…出港前からなにやら元気がなさそうだったわ。
あの日の朝はむしろ元気だったのよ。今回の作戦は指揮官の初めてのアズールレーンとしての任務だから、絶対に成功させなきゃって張り切っていたわ。」
そうだったのか。と小さく相槌を打つ。
ウォースパイトは言葉を続けた。
「ねぇ指揮官。あの子、あの日の朝の作戦通達の後、少しの間指揮官室に残ってたみたいだけど、もしかして何かあったのかしら?
あの子が帰って来てから補修が終わった後私が付き添っていたのだけど、うわ言のように貴方に謝っていたわ。「指揮官様、ごめんなさい」って。」
その言葉を聞いてから、頭の中で何かが弾けた気がした。
「…ウォースパイト、報告ありがとう。ちょっと、行ってくる。留守を頼む。」
「え…指揮官、行くってどこに!?」
唖然としたウォースパイトを置いて、最初は早足に、しかしいつのまにか腕を大き振ってロイヤル寮に向かって走っていた。
(馬鹿野郎!馬鹿野郎!なぜあんなことを言った!?なぜ本音を素直に口にしなかった!?余計なことばかり考えやがって!!)
あの時、イラストリアスに怒鳴りつけた自分を心の中で責め立てる。

そうだ。予定が狂いそうになったから怒った訳じゃない。
予定が狂うのは自分が悪いか、運が悪いかの二つでしかない。決して他人のせいにしてはいけない。
あの時、何故飛び込んだ？
それはイラストリアスが怪我をしてはいけないからだ。
思えば、艦隊編成の資料を作成している時も、イラストリアスの名前は最後に書いた気がする。
だからこれは、間違いない。自分は「指揮官と艦船少女」としての関係を超えて、イラストリアスを大事にしようとしている。
これではいけない。軍人として毅然としなければ。
そんな建前がどこかから聞こえた気がした。だから、彼女への想いなど無いと自分に言い聞かせて今まで一歩だけ下がって彼女を見ていた。
（そうじゃない！そうじゃないだろ！
彼女だって言っていたじゃないか！彼女達にとって最も大事なものは、身近にいる人の思いだって！
彼女は教えてくれようとしていたんだ！俺が心のどこかで彼女達に壁を作っていることを！その壁を超えて自分達と接してほしいと！

なのに俺は変に格好つけて、外聞を気にして、余計な感情だと切り捨てた。それが彼女達を傷つける行為だと理解しようともせずに！）

ロイヤル寮が見えてくる。庭にはアフタヌーンティーを楽しむ艦船少女達、窓を見ると掃除をしているロイヤルメイド隊がいる。

自分が寮の門を開け放すように飛び込んで、走って行くのを驚いて見ている。

寮に入ってイラストリアスの部屋を目指す。場所は一度だけ仕事が夜遅くなってしまった時に送ったことがあるからわかっている。

扉の前に立つ。そこには『ＨＭＳ　Ｉｌｌｕｓｔｒｉｏｕｓ』と彫られた豪奢なタペストリーがある。

荒れた息を整えて、２回ノックする。

「…どなたですか？」

イラストリアスの声が聞こえた。

「イラストリアス、俺だ。…入るぞ。」

「え、し、指揮官…様？だ、だめですわ！わたくし…。」

彼女の制止は無視して、扉のノブに手を掛けて押す。鍵はかかっていなかった。

部屋の中はカーテンがかかっており、暗かった。

ロイヤル寮の部屋は、かかっている予算は他の寮と変わらないのに内装も凝ってお

り、まるで高級ホテルの一室のような雰囲気を持っている。
そんな部屋の、窓際に部屋の3割は占めているであろう大きなベッドがあり、イラストリアスはそこで毛布をたくし上げて顔を隠してしまっていた。
暗いままでは仕方ないと思い、灯をつけようとすると、
「あ、あの！今、私…顔を見られたくなくて…このままで、お願いします…。」
「…わかった。」
ここはイラストリアスの意思を尊重しよう。彼女が見られたくないと言うなら、無理に見ようとすることはない。
今ここでやりたいことは、彼女の顔を暴くことではない。
「じゃあ、イラストリアス、そのままでいい。落ち着いて、聞いてくれないか？」
「……はい。」
消え入りそうに震える彼女の声が恐れを伝える。
それを聞くだけで自分は今ここで自分の頬を殴りつけてやりたくなった。
それをぐっとこらえて、彼女に聞こえないよう静かに深呼吸をして、言葉をゆっくりと紡ぎ始めた。
「まずは…昨日は…すまなかった。突然怒鳴ったりして。」
「っ、いいえ！指揮官様は悪くありません！あれは私が勝手に転んで、それを庇ってくれ

たからで！

…私も浅はかでした。

あの時、浮かれていたんです。指揮官様が初めて私の淹れた紅茶が飲みたい、って言ってくれたような気がして。

作戦前でしたし、少しでも早く準備して指揮官様とお話ししたいなって思って、普段なら艦載機に運んでもらっているものを私一人で運ぼうとして…」

なるほど。何気なく言った言葉だったが、彼女にとっては初めて頼られたという嬉しさがあったのかもしれない。

「考えてみれば、指揮官様はいつも私を支えてくれました。

初めて会ったあの日からずっと、私のそばにいてくれる間は常に私を気遣ってくれていました。

私、こんな不恰好な体でしょう？昔から言われていたんです。「不恰好で扱い難い」って。でもあの頃は資源もお金も不足していて、選り好みしている余裕がなかったから使ってもらえてた。」

確かに歴史を紐解くと、彼女の身体バランスの悪さは、装甲による重心の高さが原因だ。おそらく操船する水兵達も手を焼いただろう。下手に急旋回を掛ければ転覆しかねないのだから。

「だから、最初は安心していたんです。現状、この母港は戦力が足りていないと聞いて、私でも使ってもらえると思っていました。

でも母校の子達が増えてきて、主力艦もエンタープライズさんやウォースパイト様のような強い船が増えてきて、怖かったんです。

もしかしたら…私はいつか使われなくなってしまうんじゃないかって。」

そこまで聞いて、自分は今までのイラストリアスの言動に抱いてた小さな疑問が氷解した。

なぜ彼女はここまで積極的に協力してくれるのだろうか？

そもそも彼女が指揮官室に来ていたのは秘書艦に任命する前からだ。

そういえば、なぜジャベリンはイラストリアスを秘書艦にするよう提案したんだろうか？

もしかしたら、イラストリアスがジャベリンに頼んだのではないか？

だとすれば、今のイラストリアスの告白は納得がいく。

イラストリアスは、居場所が欲しかったんだ。

たとえ戦略的な価値が失われても自分が必要としてもらえる場所が欲しかった。

だから秘書艦になりたかったのだ。

だから紅茶を淹れる役割をロイヤルメイド隊から譲ってもらっていたのだ。

今回の任務で彼女を旗艦に指定した事を知って、おそらく彼女の喜びは有頂天になっていただろう。
しかし、失敗してしまった。
紅茶を淹れるという役割は、転んでしまったことで覆水に帰した。
その事で信頼してもらいたい指揮官には叱責を受けてしまった。
極め付けには、任務において、ユニコーンを守るためとはいえ、旗艦である自身が中破してしまった。
誰かが言っていた。
より強い絶望は、より強い喜びの後にこそ現れると。
今のイラストリアスがまさにそれだ。
だから、自分は…
「イラストリアス！聞いてくれ！
俺が君を庇ったのは、俺が君を怒ったのは、君が自分の仕事の邪魔になるのが嫌だったからじゃない！純粋に君を傷つけたくなかったからだ！
あの時、もし君が編成に組み込まれてなかったとしても、俺は君を庇っていた。
怒ったのは…君が自分なんかと言っているのを聞いて、もっと自分に自信を持って、大事にして欲しいと思ったからだ…。

バカは俺だ。
アズールレーンという大きな組織を預かって、急変した事態に対処する切り札としての責任で焦っていた。
それで仕事を完遂させなきゃと思って、変なプライドで壁を作って君の思いを無視していた。
でも、違うんだ。俺は…イラストリアス、君が好きだ！愛してる！君と共に行けるならどんな苦境を前にしてもまっすぐ立っていられる！むしろ君が居なければ膝を折ってしまうかもしれない！
君の力が欲しい！君の笑顔を見ていたい！君と共にこの海を歩んでいきたい！
だから、そんな悲しい事を言わないでくれ。
俺の隣で笑っていてくれ。
俺には…君が、必要なんだ。」
彼女を強く抱きしめる。
言いたいことは言い切った。
しかしまだ不安は残る。
自分の答えは正しかっただろうか？
彼女はこれを聞いてどう思っているだろうか？

「……ですか？」
「え…？」
「いいん…ですか？私は…あなたの隣に…いて、いいんですか？」
「あぁ…こちらから頼む。俺の隣に、いてもらえるかい？」
「～～っ！はい！」
　自分の背中に彼女の長く細い腕が回るのを感じる。ここまで近づいたことで、初めて彼女の鼓動が聞こえた気がした。
　感極まった彼女の嗚咽が止むまで…部屋には時計の時を刻む音だけが響いていた。
「…指揮官様。」
「なんだ？」
「私達は、指揮官様に本当の愛を戴くことで、本来の能力以上の力を発揮できるようになりますわ。
　そのためには…『ケッコン』という儀式が必要になります。」
「……」
　実のところ、それは知っていた。
　ケッコンは、艦船少女の最も身近な人物がその本人との間に真実の愛を育んだ先にある限界を超える儀式。

重桜で発見されたこの性質だが、実例は非常に少ない。
当然だ。少女の姿、心を持っているとはいえ、下手に彼女達と交わればそれは軍規に反する行為と定められているからだ。
だから自分も、下手に一線を超えないようにと自制していた部分もあった。
その儀式自体は特別な儀礼を行うわけではない。手順は二つ。
一つは誓いの指輪、すなわちエンゲージリングを渡すこと。
そしてもう一つは…
「イラストリアス…本当にいいのか？」
「はい。指揮官様のことなら、イラストリアスはな～んでも受け入れちゃいますから。だから…指揮官様の思い…
全部イラストリアスに教えて？」
…
イラストリアスと心を交わし合ったあの日、その翌朝のこと。
「指揮官？いるかニャ？」
制服に着替えたばかりのタイミングで、ノックに合わせて明石の声が聞こえてきた。
扉を開けると、やはり明石だ。
「なんだ明石？こんな朝早くに。」

「指揮官に渡したいものがあるニャ。中に失礼するニャ。」
指揮官室にさっさと入る明石。
その意図がつかめないまま、自分は明石と向き合うようにワークデスクの前に腰かけた。
「コレを指揮官にプレゼントふぉーゆーだニャ。」
「…？」
手の平にすっぽり収まるサイズの小さな小包。
リボンがついてるからにはくれるということだろう。
包装を解くと、高級感のある箱。この形は見覚えがある。
開くとそこには、キラキラと輝く指輪が入っていた。
「まさかコレ…」
「そのまさかニャ。
指揮官もそろそろお気に入りの子が出来た頃かと思って用意しておいたニャ。
本当は商品なんだけど、まぁ、明石から直接の就任祝いをまだ送ってなかった気がするし、指揮官になって一ヶ月お疲れ様ってことで、今回だけ特別ニャ。」
こちらの事情についてどこまで知っているかなどおくびにも出さず、あくまでこの建前を崩すつもりはないようだ。

「別に使わないなら持って帰ってもいいけどニャ～。」
「いや、ありがたく受け取るよ。」
「そうかニャ？指揮官も隅に置けないニャー。」
それじゃあニャア。と言って明石は帰って行く。
それからしばらくして朝８時。秘書艦の出勤規定時間ピッタリに、扉が開く。
「おはようございます指揮官様。今日も聖なる輝きを貴方のために届けて差し上げますわ。」
彼女の笑顔はキラキラと輝いている。
やはり彼女には笑顔でいて欲しい。
そしてその笑顔は、常に自分の隣でこそ輝いていて欲しい。
そう改めて思い、自分はデスクの椅子から立ち上がった。
…

ユニコーンの憂鬱～ＨＭＳ　Ｕｎｉｃｏｒｎ～

こんにちは。私の名前はユニコーンです。
ロイヤルネイビーの軽空母。フネだった時は補給支援空母として色んな空母のお姉ちゃん達のお手伝いをしてました。
ユニコーンには好きな人がいます。
その人はこの母港で指揮官として働いているお兄ちゃん。あ、でも、お兄ちゃんって言うのはユニコーンがそう呼んでるだけで、本当のお兄ちゃんではないよ。
お兄ちゃんの母港のドックでユニコーンは建造されたの。だから、ユニコーンはお兄ちゃんのものなの。
着任したばかりの時はお兄ちゃん、とても忙しそうで、口数もあまり多くなかったから、少し怖かった。
でもね、ほんとはすごく優しいんだよ？お仕事したら頭撫でてくれるし、偉い人が来て怖かった時はイラストリアス姉ちゃんに来てもらってお仕事代わってもらったり…。
あ、イラストリアス姉ちゃんって言うのはね？ユニコーンより先に母港で働いてた空母のお姉ちゃん。

私がまだフネだった頃の最初のお仕事が、イラストリアス姉ちゃんの護衛だったの。それとね、私の設計はイラストリアス姉ちゃんがモデルなんだよ！

そう言えば、お兄ちゃんもイラストリアスお姉ちゃんのいる時はいつもより優しいお顔になってたな。

ユニコーン、お兄ちゃんの役に…立ててるのかな？

…

今日はユニコーン、お兄ちゃんに連れられてお出かけです。お仕事じゃないみたい。らいぶ？

しんちぇん？っていう人の歌を聴きに行くんだって。

…すごい。キラキラの衣装を着て、キラキラの歌声で。ユニコーン、歌のことはよくわからないけど、とってもドキドキした！

それに、横で見てたお兄ちゃんがとても楽しそうだった。

あんな顔、もしかしたらイラストリアス姉ちゃんの前でもしてなかったかも。

あの後、星坐さんにお手紙を送ったら、あの時のキラキラの衣装を貰っちゃった。

どうしよう…でも、「小さな勇気は最強の魔法」って教えてもらったから、ユニコーン、頑張る！

…頑張ったよ。そしたらね、お兄ちゃん、すごく嬉しそうな顔でユニコーンを抱きし

めてくれたよ！

でもね、その後動かなくなっちゃった。ビックリして明石さんに見せたら、興奮しすぎで失神しただけだって。

なんだかイラストリアス姉ちゃんの知らないお兄ちゃんを見た気がして、少し、嬉しくなっちゃった。

ユニコーン…悪い子かなぁ？

…

お兄ちゃんとイラストリアスお姉ちゃんが、結婚するんだって。

この間、イラストリアスお姉ちゃんは、ユニコーンのせいで怪我をして、それから暫くお部屋から出てこなくなっちゃってた事があったの。

その時、お兄ちゃんが凄い勢いでロイヤル寮にやって来て、イラストリアスお姉ちゃんの部屋に入っていったのを見たよ。

実はね、ユニコーン、その時の二人のお話を、聞いてたんだ。

凄かった。

お兄ちゃんはイラストリアスお姉ちゃんを大好きなんだって。

イラストリアスお姉ちゃんもお兄ちゃんとずっと一緒にいたいんだって。

そこまで聞いて、ユニコーンはね、お部屋に帰っちゃった。

ユーちゃんを抱きしめて、お布団の中に潜ったら、なんでだろう。涙が溢れて止まらなくなっちゃったよ。

知りたくなかった。

…ううん、違う。

知ってたよ。お兄ちゃんとイラストリアス姉ちゃんは仲が良かったもん。

二人でいる時、凄く楽しそうだったよ。

ユニコーンがあの服を着て見せた時みたいなのとは違うお兄ちゃんの顔。

いつもユニコーンの隣で微笑んでくれていたのとは違うイラストリアス姉ちゃんのキラキラした笑顔。

だから、きっと、認めたくなかった。

だって、ユニコーンだって、お兄ちゃんが大好きだもん。

イラストリアス姉ちゃんも大好きだけど、お兄ちゃんと一緒にいたくて、他のお姉ちゃん達よりも、ユニコーンと一緒にいて欲しいって思ってるもん。

お兄ちゃん、やっぱりユニコーンは、いい子じゃ無いよ。

…

お兄ちゃんとイラストリアス姉ちゃんの結婚式の前日の夕方に、式場に来たら、お兄ちゃんとイラストリアス姉ちゃんがいました。

式場を用意してたロイヤルメイド隊のお姉ちゃん達はお仕事終わったのかな？もういないみたい。

「……」

夕日に照らされた会場の中で、幸せそうに笑っている二人を見て、心の中にぐるぐると嫌な言葉が回ってて、そんなことは言っちゃダメってユーちゃんを抱きしめて、目に溜まった涙を流さないように上を向いたら、

「雨、降らないかな…」

つい、そんな言葉が口から溢れました。

ハッとして周りを見回したけど、大丈夫、誰にも見られてない…よね？

ダメ、これ以上ココにいたら、ユニコーン、本当の悪い子になっちゃう！

そう思ったら、いつのまにか自分のお部屋で眠ってて、ロンドンさんが夕飯の支度ができましたって呼びにきてた。

「…いらないよ。ユニコーン、今日はもう、何もいらない。」

ロンドンさんは心配してくれたけど、すぐに行ってくれた。

…どうしたらいいのかな。

ユニコーンはお兄ちゃんが大好きで、イラストリアス姉ちゃんも大好きで、二人とも私のことを大事にしてくれてる。

でも、お兄ちゃんの一番はイラストリアス姉ちゃんで、イラストリアス姉ちゃんの一番もお兄ちゃん。そして、ユニコーンの一番は…

「わかんない…わかんないよ…助けて…」

嫌われたくない。

大好きな人に嫌われたくない。

大好きな人を嫌いになりたくない。

でも、ユニコーンの「好き」は、お兄ちゃんを困らせる。

このままお兄ちゃんを「好き」でい続けたら、いつかイラストリアス姉ちゃんのことを嫌いになりそうで、そうなったら、イラストリアス姉ちゃんもユニコーンのこと嫌いになる。

それはやだ。

嫌われたくない。

嫌いになりたくない。

困らせたくない。

でも…「好き」でいたい。

…

音が聞こえる。

扉を小さく叩く音。
鍵はかけてないよ。
扉が開く音。
何も言わないの？
足音が近づいてる。
…誰？
「ユニコーンちゃん、そのままでいいですから、お話ししましょう？」
イラストリアス…姉ちゃん？
「夕飯を食べてなかったみたいだったので心配になって、サンドイッチを持ってきたの。食べる？」
「…ううん、いらない」
「そう…」
コトリ、お皿を置く音。
少し静かになって、イラストリアス姉ちゃんが帰ったのかと思ったけど、
「ユニコーンちゃんは、指揮官様のことが大好きなのよね？」
急にそんなこと言われて、ビックリしちゃった。
「わかるわ。ユニコーンちゃんは甘えん坊さんだから、指揮官様みたいな方は相性がい

いもの。指揮官様も、ユニコーンちゃんの事を話すときは本当に幸せそうな顔をしてたわ。」
「でも、お兄ちゃんはイラストリアス姉ちゃんと…」
　ケッコンするんでしょ？という言葉が出なかった。
「そうね。きっと、ユニコーンちゃんの欲しい『好き』と指揮官様のくれる『好き』は違うかもしれないわね。」
　お腹の中がキュッと締め付けられた。
　イラストリアス姉ちゃんは、ユニコーンの気持ちを知ってたの？
「ふふ…気づかないと思ってた？きっと、ベルファスト達も気づいてるわ。だって、ユニコーンちゃんの指揮官様を見る目、私と同じだもの。」
　心臓がバクバクと大きな音を立ててるのが聞こえる。
　イラストリアス姉ちゃんは、怒ってる？ユニコーンがイラストリアス姉ちゃんのお兄ちゃんを羨ましがってて、嫉妬してるのを怒ってる？
「それがわかったとき、不思議なんだけど、嬉しくなっちゃった。」
「え…？」
　なんで？ユニコーンの欲しい「好き」は、イラストリアス姉ちゃんにとって嬉しいの？なんで？

イラストリアス姉ちゃん、今、どんな顔をしてるの？

被ってたおふとんを少し持ち上げて、隙間から見たイラストリアス姉ちゃんの顔は、いつもと変わらない優しい顔でした。

「ユニコーンちゃんと私は、似ているけれど少し違う。私を支援するために、私の設計図をモデルに造られたフネ。

だから支援空母ユニコーンは正確に言えば私の妹ではないわ。でも、私の隣で戦ったことのある妹は貴女だけなのよ？

だから、私にとっては貴女の存在は特別なの。私の為の、「イラストリアス級（わたしたち）」とは違う、私の妹。」

イラストリアス姉ちゃんは、いつもよりおしゃべりでした。

「だから、ユニコーンちゃんは指揮官様が好きなんだって、同じ人を好きになれる子なんだってわかって、『あぁ、やっぱりこの子は私にとっての特別なんだな』って改めて思えたわ。」

そこまで聞いて、ユニコーンは余計に辛くなって、枕に顔を埋めちゃった。

「やめてよぉ…優しくしないで…。ユニコーンは…悪い子だもん。

イラストリアス姉ちゃんとお兄ちゃんの結婚式に雨が降っちゃえなんて思うような悪い子だもん。」

そんなユニコーンの髪を、イラストリアス姉ちゃんは優しく梳くって撫でてくれました。
「はいはい、悪い子悪い子。でも、やっぱりいい子。
私達を祝福したいけど、嫉妬しちゃって素直になれないから、不運を願ったのでしょう？」
外から音が聞こえます。しとしと…雨の音？
「雨…」
「やっぱり、降ってきたわね。綺麗な夕焼けだったから、もしかしたらって思ってたわ。これぱっかりはどうしようもないもの。」
「じゃあ、明日は…？」
「もちろん、雨の中で結婚式をしますよ。でもきっと指揮官様は気にしないわ。あの人はちょっとやそっとの不運で挫けるような方ではないから。」
「そう…だよね。」
「だから、ユニコーンちゃんが指揮官様を好きでいたって、それで指揮官様を困らせてしまったって、そんなことでユニコーンちゃんを嫌うような方ではないわ。」
その言葉で、ユニコーンの中で何かが、少しだけ軽くなった気がしました。
「指揮官様はいろんな艦船の子達と関わって、彼女達のために最善を尽くしてくれる。

だからみんな、程度は違えど指揮官様が好きなのよ。
だから、ユニコーンちゃんの想いだって、指揮官様はきっといつでも受け止めてくださるわ。」
ここで自分の気持ちを黙って、「うん、そうだよね」って言えば、きっとこの先も困らない。けど、どこかから応援する声が聞こえたの。
小さな勇気こそ、最強の魔法。
だから、ユニコーンは顔を上げて、イラストリアス姉ちゃんにまっすぐ向きました。
「…お兄ちゃんの前で…ワガママしてもいい？甘えても…いい？」
「ええ、指揮官様だけでなく、私にもどんどん甘えてちょうだい。」
「ユニコーン、全然いい子じゃないよ？それでもいい？」
「ええ、ユニコーンちゃんのいいところ、悪いところ、みんな、ユニコーンちゃんの大事なところなんだから。
何より、大事な妹なら、ワガママを聞いてあげるのは、お姉ちゃんの役目です！…なーんちゃって、ね？」
おいで、と両手を広げて誘ってくれたイラストリアス姉ちゃんに、ユニコーンが近づくと、ぎゅうって抱きしめてくれました。
「いい子悪い子可愛い子。ユニコーンちゃんは私の妹。私の為に造られて、私と同じ時

間を生きて、今こうして私の事を慕ってくれる大切な子。
そんな大切な子が、私の好きな人を好きでいてくれるなら、それはどんなに幸せな事でしょう？
安心して、この母港にいる限り、私も、指揮官様も、貴女のそばを離れたりはしないから。」
ユニコーンは、柔らかなイラストリアス姉ちゃんの腕の中で、目がさめるまで、泣いてたそうです。
…
「ん？ユニコーンじゃないか。どうしたんだ？」
「な、なんでもないよ。なんでもないけど…ここにいちゃダメ？」
「うーん、これから各施設の視察まわりにいくから、指揮官室は空けちゃうんだ。それでもよければ…」
「あの…一緒についてっていい？」
「…いいよ、一緒に行こう。」
結局、お兄ちゃんとイラストリアス姉ちゃんの結婚式は、雨の中でも行われて、体育館を使ってパーティ会場にして、雨の音に負けないくらいに賑やかに行われました。
イラストリアス姉ちゃんは、前よりもさらに張り切ってお兄ちゃんの為に頑張ってま

す。

お兄ちゃんは、イラストリアス姉ちゃんとケッコンしてから笑顔が増えました。他のみんなに対しても、前より優しくなった気がします。

そして、ユニコーンは、お兄ちゃんに告白しました。

もちろん結果はダメだったけど、お兄ちゃんはユニコーンに「本当の妹みたいになってほしい」って言ってくれました。

男の人として好きなのは変わらないけど、お兄ちゃんが私を大切にしてくれる気持ちは知ってるから。

「お兄ちゃん、今度、またイラストリアス姉ちゃんと一緒にお出かけしよう！」

私は、お兄ちゃんが大好きです！

…